

楽し句つぶや句自分らし句

日根野 聖子

(第四回滑稽俳句大賞 次点受賞)

俳句を始めて八年になります。きっかけは、八木健会長の俳句に出会ったことでした。

「かき氷どの部分からくづさうか」「肩の蠅家来のやうについて来し」
「口答へはきはきとして入学児」「げんげ田に寝しひとがたの残りけり」
「歳末の玩具売場の子をはがす」「新宿区渋谷区千代田区みな春めく」「春
昼の仔豚十匹同じ顔」「失踪の前歴のあるかぶと虫」「席はづすやうに蜻蛉
とび去れり」「そこらぢゆうの光あつめて福寿草」「てのひらをくまなく調
査天道虫」「ばらまいたやうに昼寝の大家族」「ひとさしゆびいそぎんちゃ
くに食べさせる」「日向ぼこなんにもしない考へない」「ポケットのとのさ
まがへる脚のばす」「星流れ告白中断してしまふ」「マフラーの巻き方案外
難しい」「虫入れて重くなりけり虫の籠」「もういいと言ふのに食へと草の
餅」「ゆびさきをのがれしほたるゆびのうら」

これらは、八木会長の最初期の作品ですが、学生時代に教科書で習った俳句とは全く違っていました。白黒の平面の墨絵であった俳句の世界が、一気に天然色の動画の風景に一変したのです。一読して、風景が見える、心の動きが生き生きと伝わってくるのです。こんなふうには、自分の見たもの、感じたことを切り取って、俳句という作品に仕上げられたら、どんなに楽しいだろうと思ったのです。

ですから、滑稽俳句を目指して俳句を始めたわけではありませんで、と

もかく、自分らしい言葉で、等身大の世界を俳句にしようと思いました。それが、今になってみますと、会長の俳句に感じた面白さは、俳句の「俳」、「滑稽」の面白さにも通じるものであったのだと感じています。

俳句の歴史は、日本の韻文学の歴史に重なりますが、そこには、日本人の生活と心が凝縮されています。更に、俳句には、現代の生活では失われてしまった、文字使いや、言葉、文法が息づいています。こんな文学は、他にはありません。世界遺産ものです。とりわけ、滑稽俳句は、俳句の本来の姿、本質を尊重しています。俳句の原義に忠実な俳句なのです。

未曾有の天災や人災、政治に経済と、見渡せば文句を言いたいことばかりですが、いつの世も人間は笑うことができなければ、人生の矛盾や不公平に耐えることができません。だからこそ、「俳諧」が生まれ、俳句が今も存続しているのだと思います。滑稽俳句は、文学という分野を越えて治療的ですからあります。これから、ますます、滑稽俳句の存在意義は大きくなっていくでしょう。

これまでの自分の作品を振り返ってみますと、滑稽にしようと狙ってできたもの、狙っていないのに結果的に滑稽であったものなど、いろいろです。もちろん、滑稽俳句ではないものも、たくさんあります。これまで、何とはなしに、漠然と滑稽を追求してきましたが、今回の受賞を機に滑稽俳人としての自覚を新たにせねばと思います。楽しく気楽に、つぶやくように自然体で、自分らしく自分の言葉で、滑稽俳句を詠んでいきたいです。